

平城京左京三条一坊一坪の調査

— 第522次

1 はじめに

当調査の調査地は、史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていた朱雀門南東の一带で、平城京左京三条一坊一坪の東半部分にあたる。

当調査は、国土交通省による平城宮跡展示館建設予定地の事前調査であり、2010年度から奈良文化財研究所が継続して発掘調査をおこなっている（第478・486・488・491・495・515次調査、『紀要 2011』『同 2012』『同 2013』『同 2014』）。また、1980年代から90年代にかけて、奈良市によっても周辺の発掘調査がなされており¹⁾、1987年には奈文研が北方の二条大路との境界付近を調査している（第180次調査）。

以下、既往の調査成果の概要を述べる。

1980年代および90年代の調査により、左京三条一坊一坪は少なくとも西面（朱雀大路沿い）と北面（二条大路沿い）には築地塀などの遮蔽施設をもたず、朱雀門前の広場的な土地として確保されていた可能性が指摘されていた。また、奈良市の調査では、坪を南北に二分する東西方向の坪内道路の存在が確認された。なお、2010年度以降の奈文研の調査では、この坪内道路の東延長部分や一坪と二坪を画する三条条間北小路などを検出し、一坪では三条条間北小路に面する南面にも築地塀などが設けられなかった可能性が高いことを確認するなど、如上の調査所見を裏づける成果を挙げている。

加えて、2010年度以降の調査により、この坪の土地利用の具体相があきらかになった。坪の北端付近では平城宮造営にともなうとみられる鉄鍛冶工房群が展開していたことを確認し、坪の中央やや南寄りではそれに付随すると思われる大型の掘立柱建物群を検出した。これにより、一坪が広場とされる前、平城遷都前後の一時期のみではあるが、広義の官衙としての土地利用がなされていたことが判明した。また、井戸屋形をとめない上段正方形・下段六角形の井戸枠をもつ大型井戸を検出し、中からは木簡や木製品・金属製品・土器・瓦など、さまざまな遺物が出土した。なお、この井戸は鉄鍛冶工房群の廃絶後に設置されたものであり、坪内道路とともに一坪が

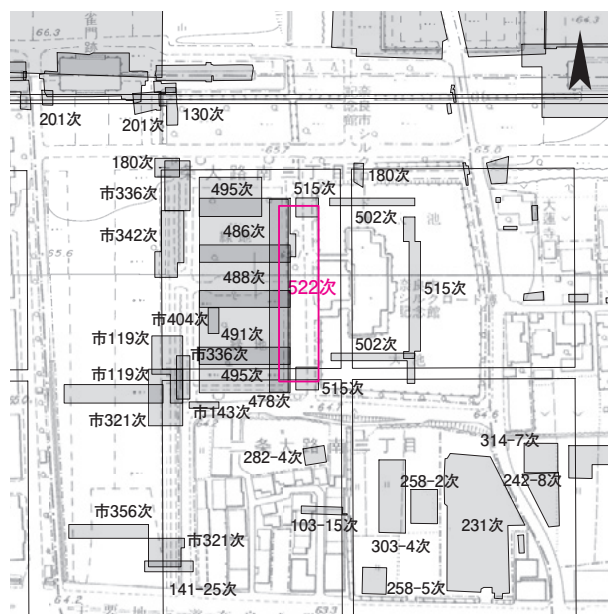


図231 第522次調査区位置図 1:4000

広場として機能していた時期の施設と考えられる。

当調査では、坪の東辺付近における土地利用のあり方の解明、およびこれまでの調査で調査区東方外側へ展開する可能性が想定されていた建物等の確認などを主な目的とし、既調査区の東側に東西21m・南北93mの調査区を設定した。調査面積は1,953㎡である。2013年12月16日に調査を開始し、2014年3月28日に終了した。

2 基本層序

当調査区内の基本層序は、上から、1988年開催の奈良シルクロード博覧会にともなう整備盛土（厚さ1.0~1.5m程度）、古代から近代にかけての旧耕作土・床土（厚さ30~80cm程度）、奈良時代の整地層（厚さ最大約30cm）、地山の順である。ただし、削平により整地層が失われている箇所も一部ある。整地層は黄褐色砂質土を主体とするが、粘質土を用いている箇所も認められる。地山は、最上層が黄褐色のシルトないし粘質土で、その下層には細砂・粗砂・砂質土などの層がみられる。

遺構はすべて、この整地土上ないし地山面上で検出した。遺構検出面の標高は、調査区北端で63.5m、南端で63.0mほどである。現地表面の標高は65.0m前後であり、現地表面下1.5~2.0mほどで遺構検出面に到達する。

なお、本調査区には幅2.5mほどの現代のボックスカルバート水路が北端から南端までほぼ中軸線上を縦断するかたちで設置されているが、その西側の据付掘方西壁、調査区中央やや北寄りの部分（後述の坪内道路SF9660の路床部分および北側溝SD9661の北側）において、整地層

と地山面の間に厚さ5～10cmほどの炭層が確認された。ボックスカルバート東側の掘方壁面では認められないため堆積範囲は部分的とみられたが、より正確な範囲の確定とその性格の究明を意図し、東西方向2本・南北方向2本のサブトレンチを設定し(図232・233参照)、また土壌を採取し水洗選別作業により遺物を回収した。その結果、炭層の土壌には冶金関連遺物が比較的多く含まれることが判明した(詳細は「4 出土遺物」参照)。ここから、この炭層は、第486・495次調査で検出した鉄鍛冶工房群の廃絶後にその残滓を含む廃土で坪内のくぼみ状の部分を地ならしした痕跡(広義の整地層)とみられる。

3 検出遺構

当調査では、新たに掘立柱建物3棟などを検出し、また既往の調査で検出していた掘立柱建物1棟や掘立柱塀1条、道路2条の東延長部分などを確認した(図232・233)。ただし、調査面積に比して顕著な遺構は少なく、特に調査区南半(後述の坪内道路SF9660以南)は遺構密度が非常に低い。

なお、遺構を検出した整地層が「2 基本層序」で言及した炭層より上層に位置するため、当調査で検出した掘立柱建物などはすべて、第486・495次調査で検出した鉄鍛冶工房群の廃絶後のものとみられる。おそらくは、坪内道路SF9660などと同時期に機能していたものであろう。

掘立柱建物SB9900 第486次調査で4基の柱穴を検出していた掘立柱建物。当調査で東延長部分に新たに柱穴3基を検出した。第515次調査で検出した柱穴1基とあわせて、桁行6間、梁行2間以上の東西棟建物になると思われるが、調査区北方外側に展開しており、全体規模は不明。桁行の柱間寸法は平均2.8mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。梁行の柱間は約2.7m(9尺)か。南側柱列の柱穴が後述の東西棟掘立柱建物SB10555の柱穴と重複しており、SB10555より新しい。SB10555を西側に1間分ずらして建て替えた可能性が考えられる。

掘立柱塀SA9901 第486次調査で3基の柱穴を検出していた東西方向の掘立柱塀。当調査で東延長部分に新たに柱穴2基を検出し、規模が4間以上であることが確かめられた。柱間寸法は3.0～3.3m(10～11尺)ほどで、

やや不揃いである。北に位置する掘立柱建物SB9900・SB10555と柱筋を揃えるようにもみえるが、両者よりもやや柱間が広く、特に西端の柱穴は西側へのずれが大きい。また、調査区東北部で検出した小土坑SK10556もSA9901の東延長部分の柱穴の可能性はあるが、想定される柱筋からはやや南にずれる。他の建物との时期的な共存関係などは未詳。

掘立柱建物SB10555 調査区北端付近で検出した掘立柱建物。本調査では柱穴3基を検出し、第486次調査で検出した柱穴2基および第515次調査で検出した柱穴2基とあわせて、桁行6間、梁行2間以上の東西棟建物になると思われるが、調査区北方外側に展開しており、全体規模は不明。桁行の柱間寸法は平均2.8mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。梁行の柱間は約2.7m(9尺)か。南側柱列の柱穴が前述の東西棟掘立柱建物SB9900の柱穴と重複しており、SB9900に先行する。東側柱列が後述の南北棟掘立柱建物SB10560の西側柱列と柱筋を揃えている。

掘立柱建物SB10560 調査区東北部で検出した掘立柱建物。桁行6間、梁行2間以上の南北棟建物と思われるが、調査区東方外側に展開しており、全体規模は不明。柱間寸法は、桁行が約3m(10尺)等間、梁行が約3m(10尺)。後述の掘立柱建物SB10561と重複するが、柱穴そのものは重複しておらず、先後関係は未詳。ただし、柱穴掘方の深さは現状30～60cmほどで、SB10561より深い傾向にある(図234)。西側柱列が前述の東西棟掘立柱建物SB10555の東側柱列と柱筋を揃えている。

掘立柱建物SB10561 調査区東北部で検出した掘立柱建物。桁行6間、梁行1間以上の南北棟建物と思われるが、調査区東方外側に展開しており、全体規模は不明。塀などである可能性もある。桁行の柱間寸法は平均2.7mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。前述の掘立柱建物SB10560と重複するが、柱穴そのものは重複しておらず、先後関係は未詳。ただし、柱穴掘方の深さは現状15～40cmほどで、SB10560より浅い傾向にある(図234)。

坪内道路SF9660・北側溝SD9661・南側溝SD9662 第478・488次調査で検出していた坪内道路および南北両側溝。路面は削平され遺存しないが、南北両側溝の東延長部分をそれぞれ約16m分検出した。これにより、検出総

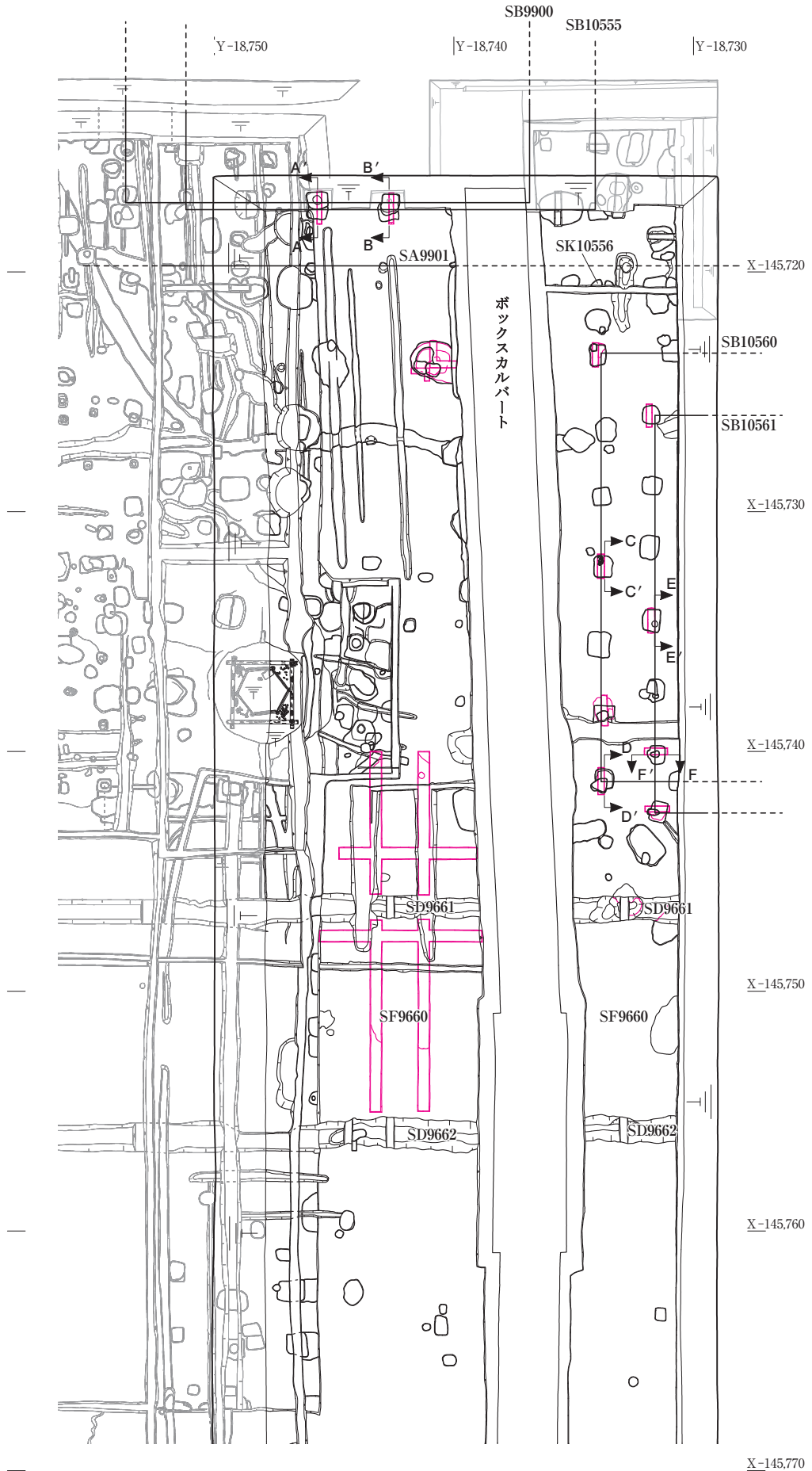


図232 第522次調査区遺構図(1) 1:250

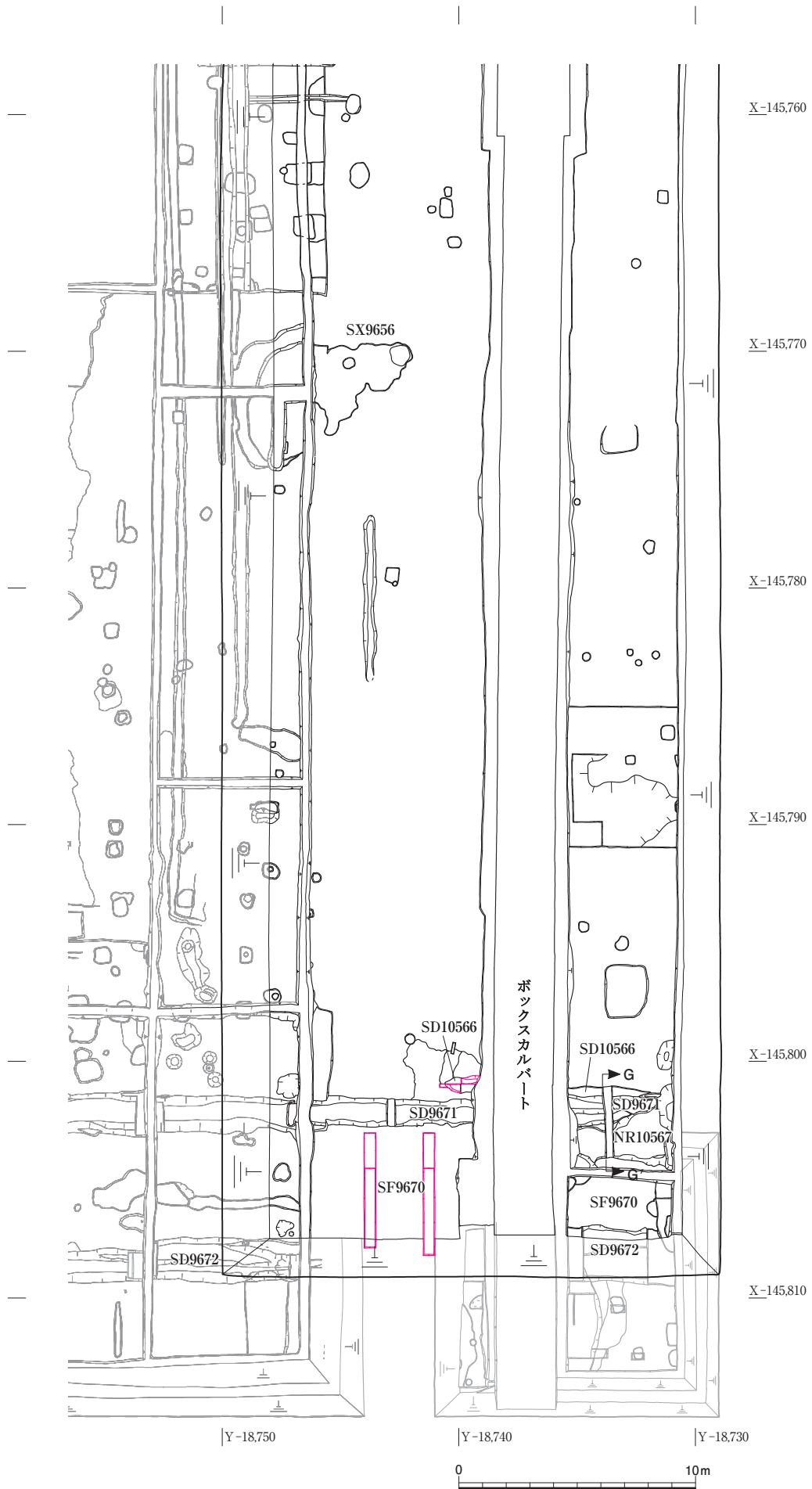


図233 第522次調査区遺構図(2) 1:250

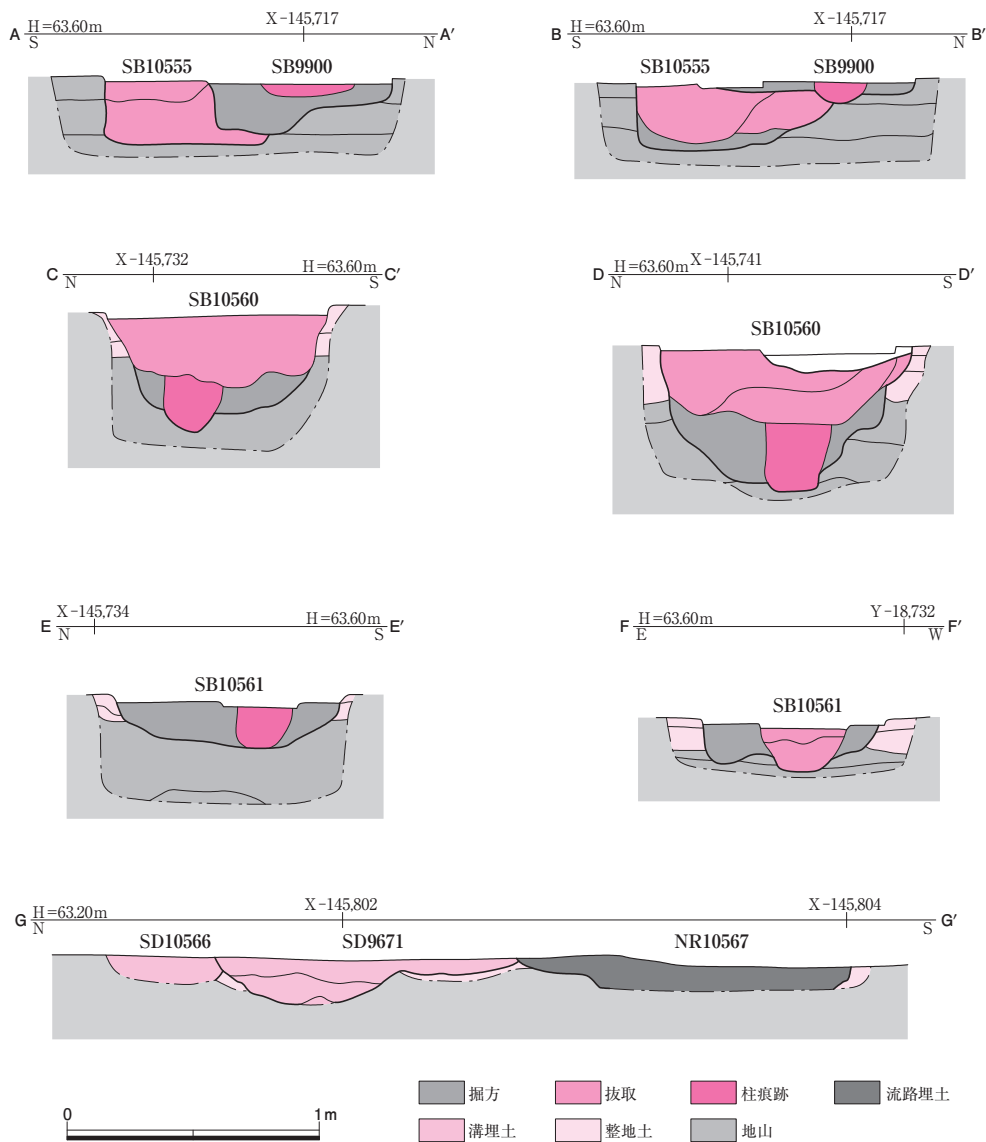


図234 柱穴断面図 1 : 30 (断割位置は図232・233参照)

長は約60mとなった。現状で、北側溝SD9661は幅0.7~1.2m、深さ15~25cm、南側溝SD9662は幅0.9~1.5m、深さ10~25cm。溝底の標高から、西から東に向かって排水していたとみられる。両側溝の心の間距離は約9m、現状での路面幅は約8m。

三条条間北小路SF9670・北側溝SD9671・南側溝SD9672
 第478・495・515次調査で検出していた三条条間北小路および南北両側溝。路面は削平され遺存しないが、北側溝の東延長部分を約15m分検出した。これにより、検出総長は約59mとなった。北側溝SD9671は、現状で幅0.9~1.5m、深さ15~35cmを測るが、東端約2m分は後述の東西流路NR10567により南肩が壊されている。溝底の標高から、西から東に向かって排水していたとみられる。なお、当調査では南側溝SD9672は確認されなかったが、これについては「5 まとめ」で後述する。

東西溝SD10566 調査区東南部で検出した東西溝。ボックスカルバートの東側で約3m分、西側で約1m分、合計約4m(ボックスカルバートにより壊されている部分を含めると約8.5m)分を検出したが、ボックスカルバート以東の部分は三条条間北小路北側溝SD9671により南肩が壊されており、SD9671に先行する遺構であることがわかる。幅は現状で最大0.7m。西端が途中でとぎれていること、および溝底の標高から、西から東に向かって流れていたとみられる。

東西流路NR10567 調査区東南部、ボックスカルバートの東側で約4m分を検出した東西方向の自然流路。西半の幅は約1mだが、東半は北肩が急激に拡張して最大2mほどまで幅を広げ、三条条間北小路北側溝SD9671の南肩を壊している。ボックスカルバートより西側では検出されなかったことから、ボックスカルバートに沿う

ように南または北に屈曲している可能性がある。溝底の標高から、西から東に向かって流れていたとみられる。

瓦溜SX9656 第478・491次調査で西半に検出していた瓦溜。当調査では、東延長部分を東西約4m、南北約4mにわたり検出した。これにより、全体の規模が東西約7m、南北約5mであることが判明した。不要となった瓦片を廃棄したものとみられる。(山本祥隆)

4 出土遺物

土器・土製品

当調査では、整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。調査面積に比して出土量は非常に少ない。出土品としては奈良時代の須恵器・土師器が主体で、古墳時代の埴輪がそれに次ぐ。柱穴からの出土は少ないが、調査区東北部で検出した掘立柱建物SB10560の柱穴(抜取)からは、奈良時代に属する須恵器甕Cの体部片がまとまって出土した。坪内道路南側溝SD9662からは、奈良時代の須恵器・土師器が少量出土した。また、三条条間北小路北側溝SD9671からは、円筒埴輪・形象埴輪片が出土した。円筒埴輪は、第515次調査南区で検出した古墳SZ10415の周濠SD10416より出土したものと同じく川西V期(6世紀前半頃)に位置付けられ、須恵質の焼成が特徴的である(『紀要2014』)。SZ10415にともなうものであろう。(小田裕樹)

瓦 磚 類

当調査で出土した瓦は表31のとおりである。ボックスカルバート付設部分を除いた新規掘削面積で比較すると、面積あたりの瓦の出土量は非常に少なく、西側の第488・491次調査と同程度の出土量である。西側の地区(坪の中心部付近)と同様、当調査区内(坪の東辺付近)にも瓦葺きの建物などはなかったとみてよいであろう。軒瓦は、平城宮・京瓦編年IV-1期の軒丸瓦6316Daと近世の巴文軒丸瓦各1点が出土した。(川畑 純)

冶金関連遺物

「2 基本層序」で言及した炭層から冶金関連遺物が出土した。これらは、炭層に設けたサブトレンチ(東西方向2本・南北方向2本の計4本)より採取した土壌(土囊袋66袋分)から、水洗選別作業により回収したものである。

遺物は、輪の羽口片のほか、褐色や灰褐色を呈する鉄滓片、炉壁片、金床石(安山岩)の剥片などである(図



図235 炭層出土の冶金関連遺物

表31 第522次調査出土瓦一覧

軒丸瓦			丸瓦	平瓦
型式	種	点数	重量	22.938kg
6316	Da	1	点数	417
巴(近世)		1		1223
計		2		

235)。いずれも完形のものではなく、碎片が多い。内容から、これらは一坪西北部の鉄鍛冶工房群に由来する遺物と考えられる。またここから、炭層は、鉄鍛冶工房群の廃絶後にその残滓を含む廃土で坪内のくぼみ状の低地部分に地ならしを施した痕跡と推察される。(芝康次郎)

5 まとめ

当調査の主な調査成果は以下のとおりである。

第一に、左京三条一坊一坪が広場的な空間として利用されていたという、既往の調査による知見が裏付けられた。当調査の調査区はこの坪の東辺付近にあたるが、西側の第488・491次調査などと同様、調査面積に比して建物などの遺構の密度は低く、また遺物の出土量も少ない。以上から、この坪の広場としての利用範囲が坪の東辺付近まで及んでいたことが指摘できる。一坪全体が一体的に活用されていたとみてよいであろう。

次に、新たに掘立柱建物3棟などを検出し、坪の東辺付近における土地の利用状況の詳細があきらかになった。全体的に遺構密度が低いなかで、調査区北半(坪内道路SF9660以北)では比較的多くの建物などを検出した。特に南北棟掘立柱建物SB10560とSB10561は重複しており共存はしえず、土地利用状況の時期的変遷を示唆するものといえる。柱穴どうしは重複しないため両者の先後関係は確定しがたいが、残存している柱穴の深さは概



図236 SB10560・SB10561柱穴検出状況(北から)

してSB10560のものの方が深い傾向にあることから、SB10560が先行し、その廃絶後にSB10561が建てられた可能性も指摘できる。また、東西棟掘立柱建物SB9900とSB10555は柱穴同士が重複しており、SB10555が先行することが確かめられる。さらに、SB10555の東側柱列とSB10560の西側柱列とが柱筋を揃えていることから、両者が一連の計画のもとに設計・建造され、同時期に機能していた可能性も考えられる。以上を勘案すると、SB10555・10560のペアからSB9900・10561のペアへの建て替えといった様相を想定することも、あるいは可能であろう。広場といっても構造物がまったくなかったわけではなく、坪の東北隅付近を中心に若干ながら建物の存在が確認され、かつそれらの計画的な建て替えの様相が推察されることは、この坪の性格や土地利用の状況を解明するための重要な知見といえる。また、SB9900は第486次調査で西側の一部を検出していたものであり、当調査でその東延長部分を検出し、桁行規模を確認したことも成果の一つである。

さらに、既往の調査で検出していた坪内道路SF9660

および三条条間北小路SF9670の東延長部分を確認したことも挙げられる。坪内道路SF9660は、本調査によりこの坪の東辺付近まで敷設されていたことが確かめられ、坪の西端から東端まで横断していた可能性が高まった。これは一坪全体の一体的な活用という所見を補強する一証左ともなる。三条条間北小路SF9670についても、特にその北側溝SD9671の東延長部分を検出したことにより、平城京の条坊設定に関する新たなデータを得たといえる。

一方、南側溝SD9672については若干の説明を要する。当調査の調査区南端東半(ボックスカルバート以東)は第515次調査南区と重複しており、そこでは第515次調査の際に南側溝SD9672を約4m分検出している(その北肩より50cmほどの部分は本調査の調査区内でも確認できる)。対して調査区南端西半(ボックスカルバート以西)では、南壁の法面を一部断ち落としつつ検出をおこなったものの、南側溝SD9672を確認するには至らなかった。ただし、第478次調査や第495次調査(特にその東半)で検出した南側溝SD9672が幅0.9mほどであったのに対し、第515次調査検出分は北肩が1.5m近く拡張し、幅2.2m前後となっている。仮に当調査の調査区南端西半の範囲では南側溝SD9672の幅が第478・495次調査検出分と同程度であったとしたら、当調査では溝の北肩まで検出が達しなかったと考えて矛盾はない。また以上から、南側溝SD9672は、ボックスカルバート付近を境に、その東側のみ急激に北側に幅を広げている可能性も想定しうる。ただその場合、それが自然崩落などによるものか、あるいは人為的に溝の掘り直しなどをおこなったことによるかは詳らかでない。

当調査を終えたことにより、平城京左京三条一坊一坪はその大部分が発掘調査されたこととなる。隣接する二・七・八坪の状況なども踏まえつつ、一坪全体の土地利用の実相やその時期的変遷などを、さらに詳細かつ包括的に解明することが今後の課題である。(山本)

註

- 1) 奈良市教育委員会編『史跡 平城京朱雀大路跡：発掘調査・整備事業報告』1999。

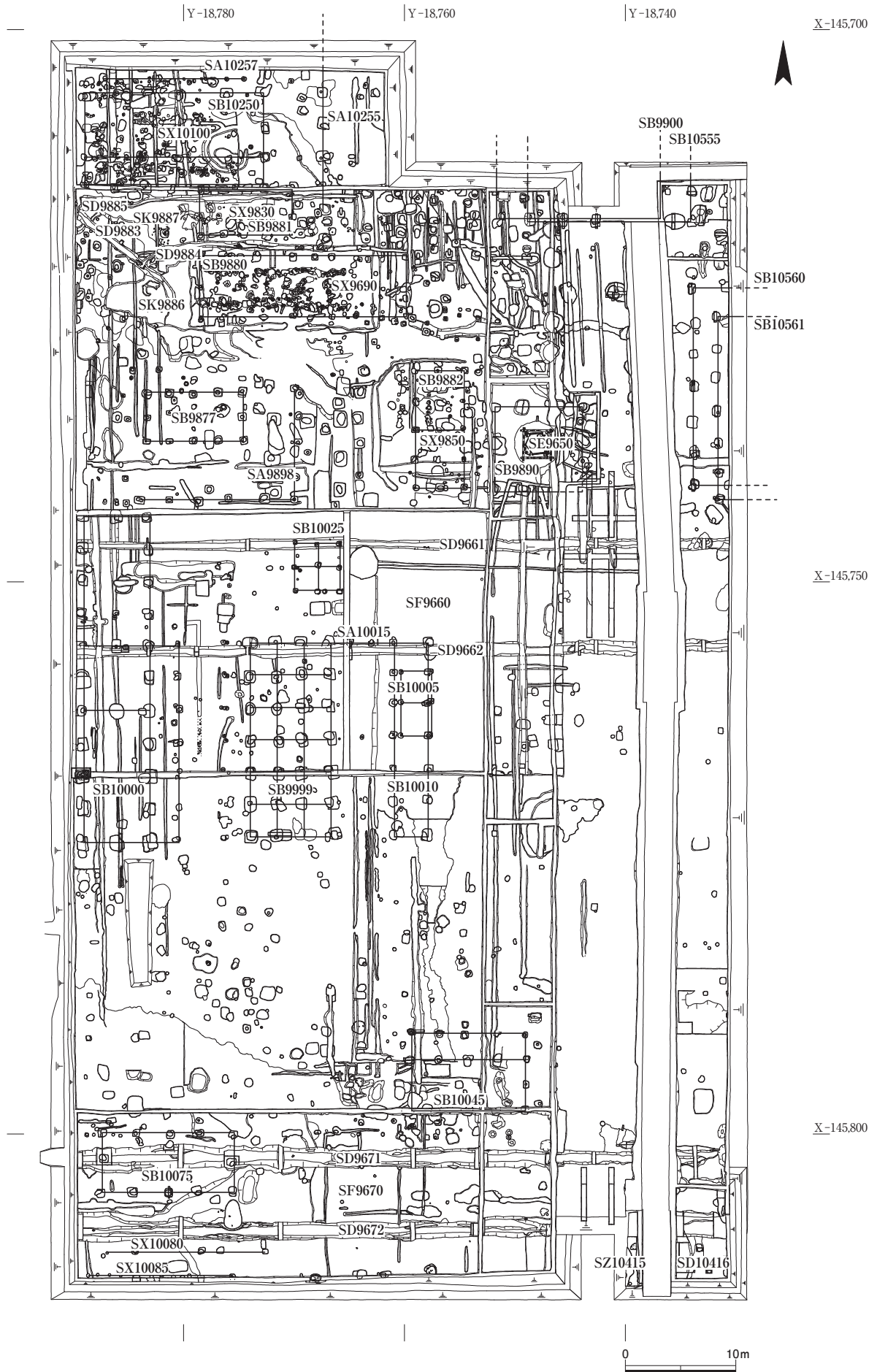


図237 平城京左京三条一坊一坪遺構図 1 : 500